

護法天堂（重要文化財）

このお堂は、もともとは、後に輪王寺となる寺院の一つである光明院(1240 年設立)を守る神主を祀っていたものである。現在のお堂は 1600 年頃のもので、現在のお堂は 1600 年頃のもので、1871 年の大火で周辺の多くの建物が焼失したが、生き残った。当時は政府による神仏分離が進められていたため、現在の場所に移築された。元々は護法天とも呼ばれる毘沙門天・大黒天・弁財天を祀っていたが、現在は不動明王と千手観音を祀っている。

相輪櫓（重要文化財）

この青銅の柱は平和のための祈りを象徴している。この柱には、かつて法華経 1000 部が納められていたという記録が残っている。

日本の天台宗の開祖である最澄（767～822）は、9 世紀に 6 本の柱を建てて国を守ったとされる。この柱は、徳川三代将軍家光（1604～1651）の命により、1643 年に日光山第 33 代住職天海（1536?-1643）が建てたものである。元々は徳川初代将軍徳川家康（1543～1616）の霊廟の近くにあったもので、柱の高さは 13.7 メートルで、塔の先端部分を模している。

五重塔（重要文化財）

塔は仏教寺院や施設にあるものが一般的だが、この塔は東照宮の入り口にある。1868 年に日本政府が神仏分離を迫るまで、日光山では神道と仏教が平和に共存していたことを物語る建築物の一つである。天台宗の中でも特に重要な五智仏を安置している。現在の建物は、1650 年に建てられた塔が焼失した後、1815 年に建てられたものである。